

教育実習事前指導の効果についての評価 システムの研究

(1) 計画・構想

倉島 敬治*

教育実習事前指導、学部段階での教育工学的手法を用いた教授スキルの指導、その他の試行の効果を教育実習における教壇実習などでどのように具現し、汎化が生ずるかを把握しようと、評価システムの構成をはかった。

制度的な改善の効果を測定するシステムと、各教科の学部での先導的試行の効果を測定する評価システム、両者の統合された評価システムの3つが考えられる。時間・労力負担からみて、サンプリングによる抽出対象のトータルな評価が、特に制度的評価システムとしては必要となろう。

昭和53年4月に発足した教育学センターは、それまでCCTV委員会の活動成果を継承し新たな組織として出発した。

学部段階でも、各科教育法、教材研究、教職関連科目においても、教育工学的手法を取り入れた教授法、教育実習にかかわる知識、諸技能が有志教官による試行がなされてきた。

組織的なものとしては、昭和54年学部有志教官により構成された教育実習検討プロジェクトチームが「あり方」・「立案」2チームに分かれ、教育実習事前(直前)指導が提案され、昭和55年8月試行、翌56年8月には“教育実習研究”1単位：必修科目として制度的に実施された。

プロジェクトチーム発足2年目という短期間の制度的改善が実現したため、多くの不備や不足する面が残っている。形式的、法規的側面は一応体裁を整えたものの、内容面においては必ずしも

共通理解が十分に得られていない。

これらも順次、修正、補充することによってより一層合意納得のいく方向をとることができよう。

教育実習改善研究は教育学センターの基本方針のなかで重要な位置を占めているので、学部段階での各科教育の講義・実習で教官からの要請に対応し、さらにプロジェクトチーム、実習委員会の活動にも積極的に参加・協力をしてきた。

制度化された本年度の教育実習が終了した段階で、教育学センターとしての立場から諸問題を整理し、より一層の内容充実のための教育・研究へと発展させるため本研究をとりあげた。

目 的

学部「教育実習検討プロジェクトチーム」の主要検討項目は次の2項目である。

* 教育学部附属教育学センター

(1) 学部教育における教育実習のあり方

(2) いわゆる過密解消のための計画立案

前者(1)は教育実習のあり方をめぐる討論資料(1980. 8)として公表されている。²⁾ 後者(2)は昭和55年度事前指導の試行案, 同実施, 昭和56年度から試行をはずし「教育実習研究」1単位として制度的改編がなされ, 実務的には実習委員会に委任され, 実施された。

さらに, このプロジェクトチームも当面の課題「いわゆる過密解消のための対策」は一応の成果をあげたとして, 今後新たな問題が生じた場合には, 従前の「教育実習検討委員会」等が対処することにして昭和56年12月15日の教授会で解散することになった。

この研究は, 教育実習検討プロジェクトチームの立案チームに参加し, 諸々の提案, ならびに実施の協力をして来たセンター専任教官として, また, 教育学センターのプロジェクトチーム「教育実習改善研究チーム」のメンバーとして継続的に行うものである。主目的は次の3つである。

1. 「いわゆる過密解消」のための計画立案, 同実施によって, 小学校課程40名増募に伴う, 教育実習の実習校教員の負担増が緩和されたかどうかを明確にする。指導教員の受持ち教生数, 教生1人の教壇実習回数の10回以上の確保(最低8回は必要という要望)されたかどうか。

2. 立案チーム報告, 提案のうち, 「(4)-D, 実習時及び事前指導においては, マイクロティーチングなどの方法を適時導入して教育実習指導法の研究開発が試みられることを期待する」に対応し, センター研究員でもある各科教育法担当教官に協力, いろいろな先導的試行を学部教育段階から実施して来ているが, これらを含めて, 直前の事前指導(学部担当)の具体的評価を行い, 本実習での効果(有効性)を把握し, さらには, 教職についてからの持続性, 発展性をも追跡したい。結局のところ最終的には本実習での成果が問われ, そのフィードバック情報は, 学部段階での指導内容

・方法などの改善につながるだろう。

3. 教育学センター教育実習改善研究チームのメンバーとして, 本年度の教育実習校に依頼し, 「教育実習生の実習経過についての調査」を実施した。これは, 教育学センターの今までの蓄積をもとに, 教育学関係の授業を開講する準備資料とするためと, 目的2と重複するが, 学部段階での教育実習事前指導(生徒なし)の試行の成果が本実習でどのように活かされるかを検討するものである。

計 画

評価系(システム)は第1表の示す構想で計画した。1. 時系列, 2. 評価主体, 3. 方法・手段, 4. 対象(情報源)が主な構成要素であり, さらに, **A: 特殊な処遇(トリートメント)の効果**; 学部段階での教育実習前教育における試行の効果たとえば, 教科教育法, 教材研究, 教職科目(教育方法, 児童・生徒理解)などで教育実習に直接的関連を持つ内容が教授されているもの, **B: 一般的な処遇の効果**; 教育実習直前の事前指導の効果を測定評価する, の2つの系列が考えられる。^{15) 17)}

後者は全実習生を対象に制度的な働きかけによるものである。教育実習研究, 教職必修科目1単位として, 各科毎の評価とは別に制度的なカリキュラムの効果をみようとするものである。^{14) 18)}

1. 時系列

A系列に入る①各教科担当教官が各自行う評価で期末の試験, レポートなどによるものが考えられる。③本実習におけるプロセスの評価は各教科学部教官によるものと実習校の指導教員によるものがあろう。これは制度的検討をするため, 組織的に行えばBの系列に入る評価となる。現在の段階では各教科毎の有志教官によるA系列が実施されている。④の時点では実習校が最終日, あるいはその近辺で実施する感想, 調査票による調査,

あるいはレポートがあるようだが、各実習校が統一して行っているわけではない。

⑤の時点では学部各々が独自に行う教育実習研究の単位認定の評価で、現在は各科にまかせられており、統一した基準はまだできていない試行の段階でA系列に入ろう。

⑥の時点では学部教員有志による独自の調査なり面接による評価が想定されるが、資料としては手に入らない。

B系列としては、②の学部担当の事前指導直後に教育実習委員会の実施する事前指導の内容に対応した調査がある。昭和55年度は教育実習検討プロジェクトチームによるものも資料としては利用出来るが、回収率が非常に悪く代表性に疑問が残る。組織的に評価資料には事後調査があってこれは、初年度②と同様プロジェクトチームによるものがあり、矢張り回収率はきわめて悪いが保存されている。昭和56年度は年度末(12月)に実施された教育実習委員会内部に小委員会が発足し調査したものがあり、各科の実習委員が説明と一斉回収している。

今回はほぼ全員に近い回収率で、調査票もかなり総体的構成がはかられており、結果の集約が待たれる³⁾。(1982. 2 中間報告)

これらのほかに、目的3に対応するものとして、教育工学センターの教育実習改善研究チームのメンバー(著者)による⑥に相当する「教育実習生の実習経過についての調査」がある。時系列的には⑥に位置づけられるが、本実習での実習生がどのような経過を経て、実習指導教員の期待する目標水準に到達したか否かのプロセスを教生一人ひとりについて、想起法により曲線で示して貰う方法で調査協力を願った。

中学校2校(附属中、盛岡市立上田中)、小学校2校(附属小、盛岡市立仁王小)のうち、小学校2校から調査結果が得られた。ほぼ教生全員に近い回収率であった。

残念にも、中学校は教科担任制なので、教生は特定の指導教員につく(学年組配属)が、必ずしも教壇実習が同一の指導教員ではなくローテーションを組んでいるため、調査の協力が得られなかった、というよりは不可能であった。

第1表 学部事前指導の効果についての評価系

	学部教育	事前指導	教育実習	事後指導	卒業		
(1) 時系列	教科教育法 教材研究 教職科目	学当 部担 担 実習校 担当 観察	本実習 観察, 参加, 教壇	学当 部担 卒業研究 養護教育実習	初任者研修 ⁸⁾		
		①▲ ②▲ 各科直後調査 評価(実習)	③△▲ プロセスの 評価	▲④ ⑤ 実習実習校 研究(各科)	▲⑥ 事後調査 (実習委員会)		
(2) 評価主体	教科担当教員	実習委 員会 委	教育工学セン ター VTR記録	実習校指導教員 学部有志教員	各官 科教 実習委員会 学部有志教員	研修主体	
(3) 方法段	試験 レポート 作品 etc.	ア ン ケ ー ト	VTR	指導記録, 研究会, 指導案, 学研, 全研 感想文, VTR	面 接 ポ ー ト レ 他 アンケート調査 教員独自の情報 収集	研修者評価 レポート他	
(4) 対象	学生	学(教 官) 生	(学生) (教員) (教官)	学生 教員 (教官)	学(教 官) 生	学生 教員 (教官)	研修生

()内は実施していない。

2. 評価主体

最終的に測定ないしは調査結果を利用するものという意味で評価主体を用いた。学部担当の事前指導直後の調査は内容についての学生の受けとり方であるから評価主体は学生であるが、利用者は教官（実習委員会）である。同様、事後指導や事後調査についても同じ。実習経過についての調査では実習校の指導教官が評価者であり、利用する主体は実習改善研究チームである。

もちろん、教育実習の改善研究に興味関心のある教育研究者に資料は提供されるので利用することはできる。

3. 手段・方法

一般に公表されている手段・方法は現在のとこ

ろ次の通りである。

1) 時点②の学部担当の教育実習事前指導（第2表）。昭和55年度もほぼ同じ。

2) 教育実習事前指導VTR記録。全日程録画（昭和56年度：仁王小，上田中，昭和55年度：附属小，附属中）

3) 本実習，教生の教壇実習，その他のVTR記録（サンプリング）同指導案付。

4) 教育実習事後調査，教育実習に関する調査（集計進行中，教育実習委員会）昭和56年度。昭和55年度は教育実習検討プロジェクトチームによる調査があり，事前指導直後調査（第2表）と略同。

5) 教育実習生の実習経過についての調査。（教育学センター実習改善研究チーム）

第2表 昭和56年度教育実習事前指導についてのアンケート用紙

昭和56年度 教育実習事前指導についてのアンケート(予)

教育実習委員会

記入者 姓 名 _____ 記添校 _____

事前指導第1日目は終了しました。
 本日の学部担当の事前指導について、皆さんからの感想や率直な意見と聞いて、来年度の事前指導に反映させたいと思います。
 それぞれ指導を受けたものについての感想と、今後改善すべき点があれば記入して下さい。
 記入後は小学校においては担当の係の先生へ、中学校においては各教科指導の担当の先生(後制教務体)へ提出して下さい。

*書き切れぬ時は裏面に書いて下さい。

項 目	感 想	改善すべき点
全体的なアンケート (10:00~11:00 本館) 学部長挨拶 教育実習の意義と心得 実習内容の留意点 事前指導連絡		
実習記録16mm VTR記録 (11:10~12:10) 小 中 別 16mm VTR 質疑応答		
小 学 校 教科:児童理解Ⅰ -体育の授業記録- VTR 質疑応答		
教科:児童理解Ⅱ -音楽の授業記録- VTR 質疑応答		
中 学 校 生徒理解について (12:00~12:30) 講義		
各教科別指導 (12:40~13:00) 各教科毎		
全体的な心得 日 程 会 場 その他		

第3表 教育実習に関する調査 (調査用紙) (その1)

教育実習に関する調査

昭和56年12月
教育実習委員会

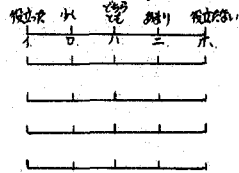
教育実習(体験+研修+事後指導)を通して教育の重要性を十分認識されたと思います。教育実習委員会としては、本年度教育実習の実態をふまえて来年度以降の教育実習の内容充実をはかるため、皆さんの意見を聞きたいと思ひます。ご協力下さい。設問に対する答えは、別紙の回答欄に該当する項目の記号を入れるか、記述するようになっています。なお、回答は設問紙、別紙回答欄に分かれているのでよく読んで記入するお気を下さい。

- 問A おなたの課程。 1. 小学校 2. 中学校 3. 養護 4. 特異
- 問B おなたの専攻教科 (小・中学校課程の者のみ記入)。
1. 国語 2. 社会 3. 数学 4. 理科
5. 音楽 6. 美術 7. 保健体育 8. 技術
9. 家政 10. 英語 11. 心理 12. 教育
13. 職指 14. 普通
- 問C 性別。 1. 男 2. 女
- 問D 本実習。
1. 附属小学校 2. 仁王小学校 3. 附属中学校 4. 上田中学校

I. 事前指導

1. 学部担当分 (8月26日)

- ① 次の掲げる各事項について本実習中の感想・実際と役立ち度などについて該当するものを一つ選んで下さい。(2)~(4)は実習校別
- (1) 全体オリエンテーション
- (2) 小学校(附属)の道徳(小学校) 教育実習の記録(中学校)
- (3) 教科・児童理解I(小学校) 生徒理解について(中学校)
- (4) 教科・児童理解II(小学校) 各科目別指導(中学校)
- (5) 全体として
- ② ①の(2)~(4)で映画フィルムVTRを用いたが、それについての意見を(1)~(5)の中から一つ選んで下さい。なお、(5)その他を選んだ人はその空欄に記入して下さい。(中学校配属の場合は(2)-b、(4)-bのみ記入して下さい。)



NO.1

- 2)-a () その他 _____
b () その他 _____
3)-a () その他 _____
4)-a () その他 _____
b () その他 _____

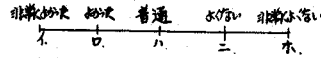
1. 現行通りの用い方でよい。
2. もっと活用すべき。
3. できるだけ利用しないで、他のプログラム(例えば、講話、講義、経験談など)で構成すべき。
4. 一切活用すべきでない。
5. その他 (OA、それぞれの場所を書き入れて下さい)

- ③ 特印象に残ったもの、特改善してほしいものを一つずつ選んで下さい。(設問①の(1)、(2)、(3)、(4)が1、2、3、4に該当します)
- ③-1) 特印象に残ったもの
{ 1. 2. 3. 4. }
- ③-2) 特改善してほしいもの
{ 1. 2. 3. 4. }
- ④ 全体を通してこれから希望する点を聞かせて下さい。(別紙回答欄の④の欄に記述して下さい。)
2. 実習校担当分 (8月27日~29日)
- ⑤ 日程・時間配分について、該当するものを一つ選んで下さい。尚、1、2、3、4、5を選んだ人はその理由も書いて下さい。
1. 足りない 2. 丁度よい 3. 多すぎる
理由は別紙回答欄⑤に記述して下さい。
- ⑥ 事前指導、実習校担当分の内容について、該当するものを一つ選んで下さい。なお、(6)については別紙回答欄⑥-6)に記入して下さい。

第3表 教育実習に関する調査（調査用紙）（その2）

N02

- (1) 講義
- (2) 授業参観
- (3) 指導授業
- (4) 同研究会
- (5) つかえて欲しいもの



⑦ ⑥の(1)~(4)のうちあなたが事前指導の中心Kして欲しいのはどれですか。二つ選んで下さい。設問⑥の(1)(2)(3)(4)が選択肢の1, 2, 3, 4に該当します。

{ 1 2 3 4 }

3. 事前指導全体の時期・期間・分担区分
該当するものを一つ選んで下さい。なお、具体的に記入する部分はすべてこの空欄に記入して下さい。

⑧ 実施時期

- 1. 今年のお正月(夏休み終了前) 2. 夏休み前か直後 3. 本実習前(自由)
- 4. その他(具体的に)

⑨ 実施期間

- 1. 今年のお正月(5日) 2. 長すぎる(日数) 3. 短すぎる(日数)
- 4. その他(具体的に)

⑩ 分担区分

- 1. 現行で可(学部一日、実習校2.5日) 2. 学部給を多く 3. 実習校分を多く
- 4. その他(具体的に)

II 本実習

本実習は観察・参加・(教壇)実習の三つから構成されています。

1. 観察・参加

⑪ 下表を埋める形で別紙・回答欄に記入して下さい。(時間は各授業時間を1単位時間として記す)

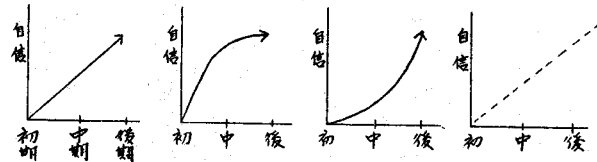
		観 察 参 加				特記事項
		回数	時間	回数	時間	
特 別 活 動	生徒活動	学級会活動				
		部会活動				
		クラブ活動				
	学校行事	儀式的行事				
		体育的〃				
		旅行的〃				
		娯乐的〃				
		学芸的〃				
	学級指導					
	教科	授 業				

※ 活動の何の大部分に於ては記入の必要はありません

2. (教壇)実習

⑫ 教壇実習は何回位行いましたか。別紙回答欄に回数を書いて下さい。
回数 _____ 回

⑬ 教壇実習のいつ頃かあなたに自信(満足できる)がついてきましたか。次の3つの型のうち当てはまるものを○をつけて下さい。該当するのない時はD型の個所に自分で記入して下さい。
1) A型(だんだん) 2) B型(すぐ) 3) C型(尻上り) 4) D型(その他)



3. 本実習全体

⑭ 大体の下校時刻(1)(2)に於て1~8までの中から該当するものを一つ選んで下さい。

第3表 教育実習に関する調査（調査用紙）（その3）

N03

⑭ 研究授業直前

⑭-① その他

1. 6時以前 □. 6時~7時 □. 7時~8時 □. 8時~10時
ホ. 10時~12時 ハ. 12時以降

⑭ 研究授業（設問⑮は⑭から⑭）がありますが、⑭）については設問紙
にその封記入して下さい。）

⑭-① 授業者となりましたか。 1. はい □. いいえ

⑭-② 学研・全研の授業への準備は何日間くらいかかりましたか。延日教
で答えて下さい。

1. 3日以内 □. 3日~5日 □. 5日~一週間
ニ. 一週間~10日 ホ. 10日以上

⑭-③ 上記の準備日数で十分でしたか。次の中から選んで下さい。

1. 時間不足 □. なんとか間に合う □. 余裕をみて取り組めた

⑭-④ 学研（学年研）・全研（合研・田研）の準備・授業・研究会を通して
充実感を感じたこと、反省させられたことを一つずつ箇条書きして
下さい。

準備	— 充実感 {	}
	— 反省点 {	}
授業	— 充実感 {	}
	— 反省点 {	}
研究会	— 充実感 {	}
	— 反省点 {	}

⑮ 交換実習について、次の中から選んで下さい。

⑮-① 期間（日程・時間）（□. を選んだ人はその空欄に期間を記
入して下さい。）

1. このまじよい □. もう少し長く（日間） □. なるべくよい

⑮-② 内容

1. 指導講話をみて充実 □. 参観時間を長く

ハ. 実際授業したい

⑯ 他校参観について次の中から選んで下さい。

⑯-① 参観校

1. このまじよい（市内） □. 市外（登岡周辺） □. 地方校
ニ. 必ずなし

⑯-② 日程（□. の他を選んだ人はその空欄に記入して下さい。）

1. 半日 □. 1日 □. 泊り日 □. その他（ ）

⑯ 教生会について見がついたことがあれば、別紙回答欄⑯）に記述して
下さい。

⑯ 実習中時間が特不足したことを下記の中から選ぶ選んで下さい。

（□. の他を選んだ人は、その空欄に記入して下さい。）

1. 教材研究 □. 子どもと遊ぶ一緒に活動する
□. 指導案作成 □. その他（ ）

ハ. 児童（生徒）理解

ニ. 教え方（指導法）

⑰ 実習中特に悩んだこと困ったことはありましたか。□. ~ハ. のうちから選ぶ
選んで下さい。（□. の他を選んだ人は、その空欄に記入して下さい。）

1. 指導上の力量不足

□. 心身上の不適応

ハ. 実習校での人間関係

ニ. 生活上（アルバイト）

ホ. 教育の現実に対する疑問

ハ. その他（ ）

⑱ 実習期間・時期

⑱-① 期間、5週間の実習期間について答えて下さい。（□. を選
んだ人はどれ位がよいかの希望も空欄に記入して下さい。）

1. 長すぎる □. 丁度よい □. 短かすぎる

希望（ 週間）

⑱-② 時期

1. 現行 □. 3次前期 □. 3次後期 □. 4次前期 □. 4次後期
（夏休み前）

第3表 教育実習に関する調査(調査用紙)(その4)

NJ4

Ⅲ 事後指導

- ㉔ 「教育実習研究」(事前指導+事後指導)が1単位となっているが負担を感じたか。
 1. 非常に感じた 2. やや感じた 3. どちらと 4. あまり感じない
 5. 全然感じない
- ㉕ 教育実習を終えて自分について何が見出せましたか。特にそう思われるもの二つを選んで下さい。又、その他を選んだ人はそこを記入して下さい。
1. 教職への適性が少ると感じた(先生仲間から言われた)
 2. 子ども好きになった
 3. 教師への意欲、意気込みが出た
 4. ユーモア、機知が必要だ
 5. 心身ともに健康オーダ
 6. 子どもが勉強好き、熱中させることができた
 7. 教科の指導法がうまくいった
 8. 根気よく教えることができた(短気を起こさず)
 9. サビス(奉仕)精神が必要だと思った
 10. その他()

1. もって内容を充実して欲しい 2. この程度でよい
 3. なくてもよい
- ㉖ 教育実習全般について意見・希望等がありましたら、別紙回答欄㉗に記述して下さい。

御協力有難うございました。

Ⅳ 「教育実習のため」——子どもたちは持っている——について㉘～㉚に答え下さい。

- ㉘ 活用の程度
 1. 大いに活用した 2. あまり活用しない 3. ほとんど活用しない
- ㉙ 利用の時期
 1. 実習前 2. 実習中 3. 実習後 4. 全期間 5. 利用しない
- ㉚ 参考になった内容
 1. 生徒理解について 2. 授業とは 3. 指導案について
 4. 道徳の授業について 5. 先輩の体験記
- ㉛ 全体として(1, 3, 5を選んだ人はその理由・希望内容を別紙回答欄㉜に記入して下さい。)

第4表 教育実習生の実習経過についての調査（記入例）

教育実習生の実習経過についての調査

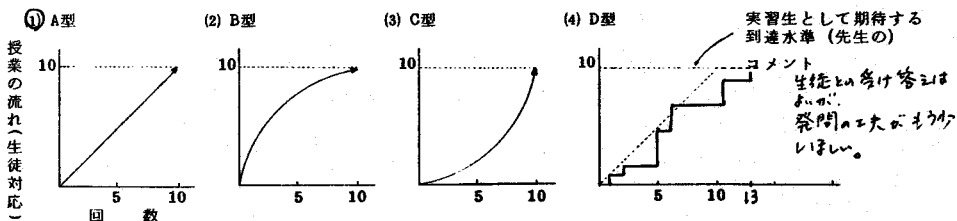
実習生 学部所属科 社会
 # 氏 名 鈴木 孝幸 ④女
 教壇実習回数 (13) 回

実習校名 〇〇〇校
 実習指導教員名 若金 一郎
 指導した教生数 (4) 人

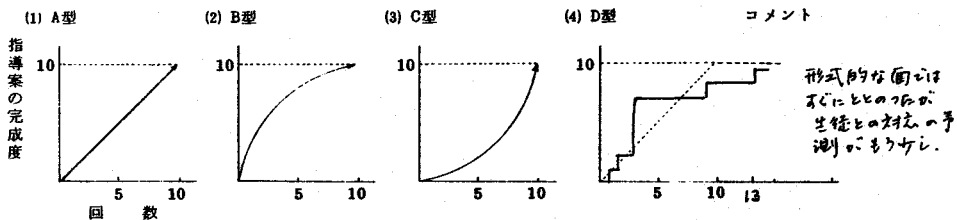
このたびは、教育実習生の御指導をいただき、有難うございました。次年度の教育実習事前指導の改善に資するため、次の調査に御協力下さいますようお願いいたします。

先生の指導されました教生についておたずねします。指導された教生は(個人別に)教壇実習の学習経過について、どのように変化して行ったかお知らせ下さい。

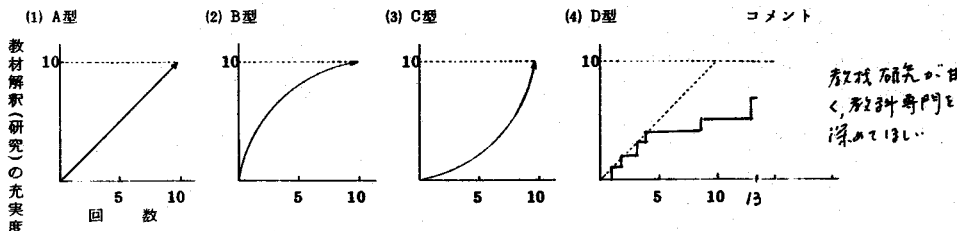
1. 授業全体の流し方(生徒との対応も含む)については、次の3つの型のうちあてはまるものに1つ○をつけて下さい。該当するものがないときは、(4) D型に○をつけその経過を実線で記入して下さい。



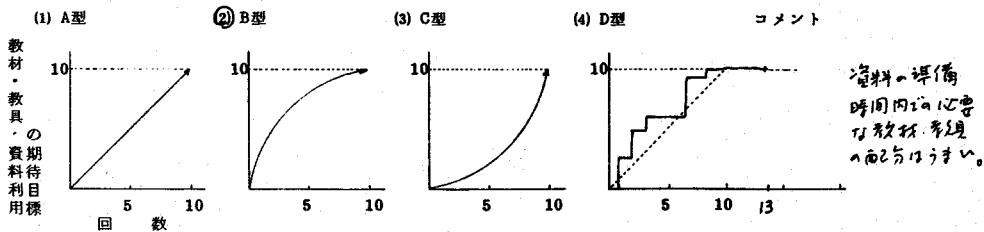
2. 指導案の作成については、どのような経過だったのでしょうか。



3. 教材解釈(研究)の充実度はどのような経過だったのでしょうか。



4. 教材・教具・資料の使い方について先生の期待した目標に、どの程度近づいたのでしょうか。



以上が公表されている(予定含む)資料である。その他は教官、実習校独自の情報収集したものがあがるが、交渉しなければ入手できない。

4. 対象(情報源)

1) 教育実習事前指導(学部担当): 学生、教官、実習校教員からの要約があるが、数量的、客観的情報は得られていない。

2) 教育実習事前指導(実習校担当): VTR記録(学生、講師)のみ。学生、教官、実習校教員からの客観的情報はない。

3) 本実習: VTR記録による学生、実習校教員、学部教官(研究会)の情報はある。客観的情報は特に学部教官からのものは殆んどない。今回は実習経過についての調査での想起法による実習校教員からの情報が得られたのが唯一である。

4) 教育実習事後調査: 学生・学部教官からの客観的情報はない。

5) 教育実習生の実習経過についての調査: 実習校教員からの情報で、4)の中に含まれる。学部教官からの情報はない。これについては学部各科で実施する「教育実習研究」の評価に伴う問題点として、要約されて教授会に報告されることになっている。

結果・考察

今回は教育実習事前指導の効果についての評価構造をまず整理した上で構築してみた。制度的変更のあった教育実習事前指導の効果を追跡する場合、単に面的評価では捉え難い。

しかし、改善検討をすすめるに当たって避けることは出来ないで、現在入手できる情報、資料、をもとに評価システム(系)を構想・計画することによって、補充すべき評価対象、情報源、手段方法が明らかになり、今後の方向づけが得られることを期待した。

必要ならば、現有の評価手段・方法では得られない情報を獲得するための手段・方法、さらには

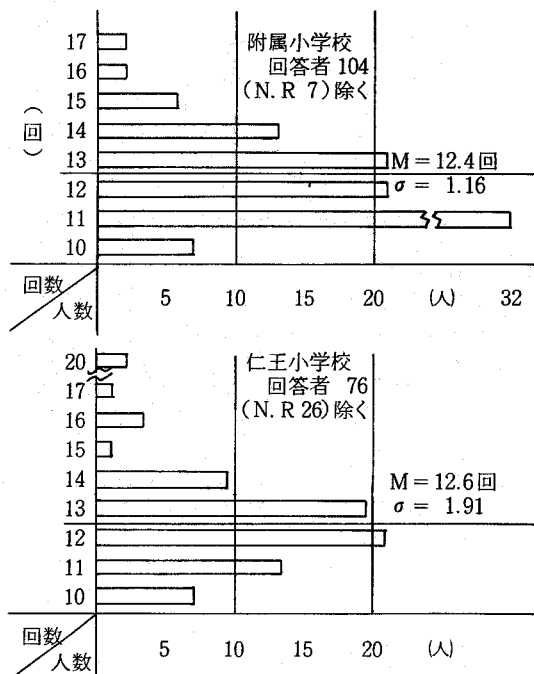
分析的手法をも開発することに発展していくだろう。

本研究の3つの目的に対応させ、それぞれ結果と考察を順次述べよう。

1. 目的の1「いわゆる過密解消のための立案、実施によって、教生1人当りの教壇実習回数の10回以上(最低8回は必要という要望)の確保」は達成されたかどうか。

第1表の学部事前指導の効果についての評価系について、を参照すれば、⑥事後調査: 教育実習事前指導についてのアンケート(教育実習委員会実施、対象: 教生)と、⑥教育実習生の実習経過についての調査(教育学センター実習改善研究チーム実施、対象: 実習校実習指導教員)の2つの調査結果が資料として使用できる。

現時点では前者「教育実習事前指導についてのアンケート」は集計・要約中で、発表されていないので、後者の「教育実習生の実習経過についての調査」を緊急に集計した結果を第1図に示す。



第1図 本実習における教壇実習回数(昭和56年度)

第1図によれば明らかなように、最低10回以上となっており、

附属小学校 平均 12.4回 SD = 1.16

仁王小学校 " 12.6回 SD = 1.91

最高は20回となっていて、当初の学部教育実習改善検討プロジェクトの目的は達成されたとみなされる。指導教員1人当りの配属教生数は、

附属小学校 5人配属 14

6人 " 7

平均 5.3人/指導教員

仁王小学校 3人配属 1

4人 " 9

5人 " 13

平均 4.5人/指導教員

以上のようになっている。附属小学校指導教員1人当りの負担が大きいようであるが、プロジェクトの検討過程で、附属校という役割・位置づけの性格上やむを得ないという附属校の申し出があり、平均化する(差をなくす)ことはしなかったという経緯があった。

しかし、問題がないという意味ではない。

問題1. いわゆる過密解消という目的が、実質的な本実習(5週間)の3.5日間の延長となって事前指導に入り込んだため、最低8回必要、少なくとも10回以上の教壇実習が確保されたことになった。過密とは過・密度のことなりという論争もあったが、指導教員が教生1人教壇実習10回以上の指導を5週間内ですることが過重負担となるという意味の過・密度なのか、教生1人が教壇実習10回以上するのに5週間では過重負担になるのか論の分かれるところである。前者とみなせば実質的期間延長になり、余裕のある(施行前比)指導が可能となったことになる。それでも、指導教員の負担増はなかったものの、事前指導の実習校担当分(2.5日)は負担が増えたことになる。学生も同様である。学部教官、実習校教員、学生の三者が一応合意、納得すれば、この問題はある程度、解決されたとみることが出来る。

問題2. 学部の教育実習検討プロジェクトの発足はもともと小学校課程40名増に伴う、実習校負担増に端を発していたが、今回の調査で小学校での教育実習の過密問題は一応解消したことになったが、この40名増の波及は幼稚園実習(1週間×4~5回×20名余)にも現われている。

一方、養護実習にも過密現象は出て来ていて毎年教育実習委員会報告でも指摘されている。

さらに、筋は異なるが、中学校課程で教科によっては(美術、特美)配属学生数が多く、教壇実習4~5回というケースも出ていることなど問題は残っている。

問題3. 今回は教壇実習の回数だけに焦点を絞って評価系を整理したが、さきの討論資料でもとりあげられているように、回数と関連して存在する実習の内容、カリキュラム、方法、形態などについての具体例、制度的検討は宿題として残っている。

このような制度的検討は、特に教育実習の内容、カリキュラム、方法などについては慎重な研究の積み重ねを経て検討しないと現場実習校の混乱が生ずるだけで、学部としてもコンセンサスが得られていない現状では、各科教官有志の試行的研究を待たねばならないし、生産的でないというのが本当のところであろう。

2. 目的の2. 立案チーム報告、提案のうち(4)-D、実習時及び事前指導においては、マイクロティーチングなどの方法を適時導入して教育実習指導法の研究開発が試みられることを期待する。……。²⁾

これは、現在のところ、数学科教育法(担当佐伯卓也)の授業内試行、マイクロティーチングを主軸にした、指導案作成、教材開発、教材研究、教材・教具の利用法、授業分析・学習診断²⁰⁾などが昭和53年度以降、続けられている。そのため、教育工学センターでも協力・分担し、事前指導、本実習、でのサンプル学生のフォローアップを進めて来た。第5表、教育実習効果の長期比較研究

計画については、昭和54年2月、第14回国立大学教育工学センター協議会で発表した構想である。

第5表 教育実習効果の長期比較研究計画について
(筆者による)

目的	（中）			
計画	小	3年後	5年後	10年後
1. 現行の教育実習効果の長期的検討		○	○	○
2. 教育実習改善後の実習効果の長期的検討	○	○	○	○
3. 実習カリキュラム改善のためのフィードバック情報の収集	○	○	○	○
4. 開放免許教師と養成免許教師の比較	○	○	○	○
現行	開放 中 養成	○	○	○
				同時調査による
	小	○	○	○
	開放	○	○	○
	改善後 養成	○	○	○
				追跡調査による
方法	1. 質問紙法、郵送法 2. 面接法（サンプリングによる） 3. 授業記録（VTR）・分析			
調査内容	1. 教科専門の力 3. 教授技術、方法 2. 児童理解、実習の動機づけ効果 4. 教育実習の改善点			
調査対象	1. 県内就職者（小・中） 2. 150～200名、各年度（約）			

この計画の目的1. 現行の教育実習効果の長期的検討、及び計画枠の現行の教育実習効果の同時調査（横断的研究）は参考資料、愛知教育大学：教育実習、事前指導改善に関する研究、第1号～3号（1977～1979）¹⁾、最近では新潟大学、教育実践研究指導センター：教育実習に関する学生の意識研究報告¹⁹⁾に至る多数の調査研究報告に譲るこ

とにして、枠内に示した追跡調査による（継続的研究）教育実習事前（前）指導の効果を明らかにすることを集中的に実施する予定である。

既に教育工学センターを利用した第1回の卒業生が教職について3年目に入っている。実験群：12名、統制群12名、数学科教育法受講生の、当時収集した指導案、マイクロティーチングVTR記録、本実習VTR記録、が比較資料として保存されており、質問紙法と面接法を加え、授業のVTR記録を計画している。^{10) 26)}

その後、マイクロティーチングを試行した音楽科教育法（吉田久五郎）、国語科教育法（望月善次）、教材開発、教科書研究を押し進めている理科教育法（井上雅夫）などについても、担当教官等の同意、協力が得られれば実施したいが、現在の段階では計画・構想の提示にとどめる。^{12) 25)}

したがって、目的2.は成果の報告は出来ない。

3. 目的3. 教育実習生の実習経過についての調査：教育工学センター実習改善研究チーム実施は、目的2.と重複するが、本実習での学部事前指導の効果を実習指導教員の要求水準を10点とする教生の到達水準のプロセスを図示、パターン化をはかったものである。

学部段階でのマイクロティーチングなどの技法が本実習においてどのように効果が継続され、発展（汎化）するかを、実習校指導教員の観察・指導を通してみようとしたものである。^{13) 22)}

ある客観的基準、尺度なりが設定されているわけではないので個人差、変動は大きいと思われるが、同じ指導教員内での比較も可能であり実施した。

資料を入手したのが原稿締切後であったので、統計的に集計できるものはプリントアウトされているが、貴重なコメントによる質的分析が時間的余裕がなく困難なので次の機会に報告したい。

教壇実習の回数が特に今回問題となっていたので、実習回数とプロセスの型についての実数だけを掲げて、今回は終りたい。

第6表 教育実習生の学習経過(型)×教壇実習回数

附属小学校

仁王小学校

1. 授業の流れ(生徒対応)

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	1	1	2	3	7
11	4	10	10	8	32
12	5	4	7	5	21
13	4	4	6	7	21 *1
14	1	6	5	1	13
15	2	1	1	2	6
16		2			2
17	1	1			2
計	18	29	31	26	104 *1

回数N.R…6

型N.R*…1

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	1	1	1	4	7
11	3	1	2	7	13
12	3	2	6	10	21
13	1	5	3	10	19
14	2	2	2	3	9
15				1	1
16	1	1	1		3
17				1	1
20		2			2
計	11	14	15	36	76

回数N.R…26

2. 指導案の完成度

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	1	4	1	1	7
11	6	9	12	5	32
12	3	10	4	4	21
13	5	4	5	8	22
14	1	6	6		13
15	2	3	1		6
16		1		1	2
17		2			2
計	18	39	29	19	105

回数N.R…6

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	1	1	2	3	7
11	4		3	6	13
12	3	3	7	8	21
13	8	2	2	7	19
14	3	2	1	3	9
15				1	1
16	1	1	1		3
17				1	1
20		2			2
計	20	11	16	29	76

回数N.R…26

3. 教材解釈(研究)の充実度

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10		1	4	2	7
11	5	10	9	7	32
12	3	7	4	7	21
13	8	3	4	7	22
14	2	6	2	3	13
15	2	2	2		6
16	1	1			2
17		1	1		2
計	21	31	26	26	105

回数N.R…6

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	1		3	3	7
11	4	1	4	4	13
12	4	4	6	7	21
13	4	2	5	8	19
14	2	1	3	3	9
15				1	1
16		1	1	1	3
17				1	1
20		1	1		2
計	15	10	23	28	76

4. 教材・教具・資料の期待目標

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	2		1	4	7
11	8	7	9	7	31 *1
12	6	4	6	3	19 *2
13	8	4	3	4	19 *3
14		7	5	1	13
15	2	1	1	2	6
16		1		1	2
17		2			2
計	26	26	25	22	99

回数 N. R … 6
型 N. R * … 6

型 回数	A 型	B 型	C 型	D 型	計
10	2	1	2	2	7
11	3	1	6	3	13
12	7	1	6	7	21
13	5	2	5	7	19
14		2	4	3	9
15				1	1
16	1	1	1		3
17				1	1
20			2		2
計	18	8	26	24	76

回数 N. R … 26

この調査にご協力載いた X 先生指摘の問題点を整理して列挙し、次年度に活かしたい。

1) 記入の労力負担。

実習終了後 1 カ月もたってわたされているのでむずかしかった。はじめからこのような調査があるとわかっていたら、それなりの対応のしかたがあったと思われしますので、来年度同様の調査をするのであれば早めにお教えねがいたい。

記入するのに大変苦勞致しました。(原文)

—この点は当方の準備不足で申し訳なく思っている。次年度からは早めをお願いしたい。

2) 調査目的

この調査の使用目的がわからない。実習生の実名を記入することでもあり、使用目的が明確でないものには、正しいコメントは書けない。来年度の教育実習事前指導の改善につかうといっていますが、記入する教師の期待する到達水準が一人ひとり違うものをどのようにデータ処理するのかはなはだ疑問である。(原文)

—これもごもっともなご意見だと思う。既に今まで述べて来た通りの目的に使用し、教師のフォローアップにおける指導教員側の観察資料として位置づけている。学部段階で次年度、教育学センター専任が開講予定の講・演習“仮；教育学講・演習”で、主に教育学的処遇の内容（カ

リキュラム）の重点構成に対応させて調査した。充分にご理解いただけるよう説明出来なかったことをおわびしたい。

3) 内容について

よい授業は深い教材研究からといわれています。深い教材解釈のないところにはよい指導案はでてこない。深い教材解釈、よい指導案のないところには、素晴らしい授業の流れも、教材教具、資料のよい使い方も考えられない。調査項目 1～4 が並列的に問われているので、どう解釈すればよいか非常にまよった。さらにコメントの例でまよわされた。1の発問の工夫がもう少しほしいというところについて……。発問は深い児童観と教材解釈がなければ発問の工夫はできない。2の生徒との対応の予測も児童理解と教材解釈から生まれる。4の資料の使い方についても同様である。

以上のような理由で正確なデータというものを得られないと思われる。基礎資料が不明確なものを統計処理しても、そのデータは不明確なものになると思われますが、どのようにこの調査の結果を使うのか、はっきりした説明がほしい。(原文)

—この疑念に対する回答、弁明あるいは釈明は次の継続されるべき研究課題に含める。

継続されるべき研究課題

Bの教育実習事前指導の導入にかかわる制度的

変更についての効果は教育実習委員会の実施した学部担当事前指導後、及び事後の調査、主として観察法・評定尺度法による組織的全体的把握を今後とも継続する必要がある。年度ごとの変化も起こるであろうし、前年との比較も可能となろう。

Aの特殊な処遇（トリートメント）の効果については、学部段階における先導的試行を行っている教科教育法、教材研究担当の教官が、本実習教壇実習初期状態（初回）から最終段階までを含めて、その効果を識別するための研究が必要となろう。マイクロティーチング、教材開発、教材研究、教材・教具の利用法、指導案作成などの習得した技術がどの程度活かされるか、それらの処遇を受けなかった教生との差異を測る指針があれば、実習指導による変化・学習と区別することができよう。

特に、学部段階での指導では生徒なし；学生生徒によるマイクロティーチングが本実習でとくにどの面で強くなっており、又一方、効果の弱い面は何か判れば、今後の指導の方向、内容、方法を工夫することができる。この場合、実習経過の調査では1の授業の流れ（生徒対応：児童生徒の理解）の面ではあまり効果がなく、マイクロティーチングを受けなかった学生と差異がないことが判れば、それに対応した方法、内容を考え出すか、あるいは無理なのかがはっきりしてくるだろう。

実習経過の型のうち、定型A、B、Cと不定型Dの割合から、重点指導すべき内容がはっきりしてくる。

例えば、附属小の場合、1. 授業の流れ、2. 教材解釈（研究）の充実度が比較的割合が高くなっている。同様に仁王小でもこの傾向はあるが、明らかに1. 授業の流れ、2. 指導案の完成度におけるD%の割合が突出していて一層強いし、3. 教材解釈も突出している。ようやく、4の教材・教具・資料の利用の期待目標が二番目に多くなっているが、実習で比較的獲得し易い技能と思われる。

このようなデータを見ると〇〇分析、をついや

りたくなる人もいるだろうが、今回は差し控えて不定型にもっとも多いコメントの質的分析を加えて、次の機会に詳しく報告したい。これも今後継続されるべき研究重要課題である。

これは一種の観察法・評定法に入ると思われるが、教生の実習経過についての調査は、学部段階での教育工学的手法を含む試行の本実習での効果が、実習指導教員の眼にどのように写るか、また実習経過にどのような効果を及ぼしているかを識別し得たかを知るために計画した。

今後、教育工学関係の授業を広く一般学生対象に始めれば、この効果、差異がはっきりしなくなるおそれがある。

はじめは、教育実習生の授業成果を生徒の学習到達度でみる方法を考えたが、組織的な活動、労力、時間などを勘案してこの調査に切替えた。

第19回国立大学教育工学センター協議会シンポジウムでパネラーの水越敏行氏の提案があり¹⁶⁾、授業成果とその評価の対応（7表）に教育工学がかわっていくことも重要な役割ではないかとされていたが、評価の方法のバッテリーを組み実施・処理する労力と負担はかなり研究者にとっても、協力者にとっても重いものである。

継続されるべき研究課題とその対象

1. サンプルによる追跡対象を限定する。
2. VTR記録の分析。
3. 指導案の内容分析。
4. シビアな振れを持つインデックスの開発¹³⁾

(1) ISM教材構造化法（佐藤隆博 1979）、教材の認知構造の変容測定、標準P-PグラフとP-Pグラフ分析（佐伯卓也 1981～）、などの利用。これらは教科教育法に重点がおかれている。

(2) フランダースの相互作用分析⁶⁾、OSIAの発問過程のカテゴリー分析¹¹⁾、シャベルソン教師の意志決定過程のモデルの応用⁹⁾。これらは児童・生徒理解に重点がおかれている。

第7表 授業成果とその評価の対応

評価の方法 授業の成果		ペーパー										作品		観察・面談			
		客観テスト					7. 論 文 体 テ ス ト	8. 問 題 解 決 テ ス ト	拡散テスト			作品法		観察法			
		1. 選 択 法	2. 組 み 合 わ せ 法	3. 単 純 再 生 法	4. 完 成 法	5. 配 列 法			6. 訂 正 法	9. オ ー プ ン エ ン ド テ ス ト	10. グ ル ー ピ ン グ テ ス ト	11. イ メ ー ジ ・ マ ッ プ	12. 日 記 ・ 感 想 文	13. 製 作 物	14. チ ェ ッ ク リ ス ト 法	15. 評 定 尺 度 法	
知 識	1. 要素的知識	◎	○	○	△	△	○										
	2. 事実の知識	◎	○	◎	△	△	○	△	△		△	△					
	3. 概念や原理	○	○	○	○	○	○	○	△		△						
	4. 関係や法則	△	○	△	◎	◎	○	○	○		△						
思 考 力	5. 学び方、調べ方			△	○	○	○	○	○	◎	○			△	○	○	
	6. 応用や変換							○	◎	○	◎		△	○			
	7. 知識の体系化							○	○		◎		○	○			
技 能	8. 観察、測定、作図												△	○	◎	○	
	9. コミュニケーション (コーディング)														◎	○	
イ メ ー ジ	10. 想像イメージ									○		◎	○	○	△	○	
	11. モデル化							○	△	○	○	○	○	△	△	○	
情 意	12. 好奇心、注意、興味、関心							△				△	○	○	○	◎	
	13. 学習意欲、探索意欲							○					○	○	○	◎	
	14. 価値の組織化、個性化							○					◎		△	△	
	15. 行動化												○	○	○		

きわめて大胆に、荒っぽくまとめると、教科教育（指導）では、教育実習生の実習前・実習後の教材構造の認知の変容を調べる方法で実習の成果を測定する指標とする。断面は2面で、認知構造が期待する水準まで変容するか否かで効果をみようとする。時間、処理労力の軽減、客観化がはかれる。^{7) 21) 24)}

次に難かしいのが、児童・生徒の理解の度合を示す指標であるが、VTR記録の初期、最終期の分析で、生徒の出すキューの把握（認知）がどの

程度可能かを示す尺度を開発するのである。緩慢ではあるが採用し易いものに指導案が考えられる。フランダース法やOSIAでは労力的負担に耐えられず、個々のサンプル対象の研究は可能でも制度的実施となるとさらに多大のエネルギーを費し、その割に実りは少ないように思われる。

最後に、本研究に御協力戴いた附属校、実習協力校の諸先生、学部教官・学生、教務係その他の方々に深く感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 愛知教育大学教育実習・事前指導改善研究会 (1977~79): 教育実習・事前指導改善に関する研究。研究報告書 第1号—3号。
- 2) 岩手大学教育学部教育実習検討プロジェクトチーム (代表 高橋八郎) (1980): 教育実習のあり方をめぐる討論資料。P 2
- 3) 岩手大学教育学部実習委員会 (委員長 菊池利昭): 昭和56年度教育実習に関する調査, 中間報告。
- 6) Amidon, E. J. & Hunter, E (1967) *Improving Teaching; The Analysis of Classroom Verbal Interaction*. New York. Holt, Reinhort & Winston.
- 7) ブラウン, J (1981): 齊藤耕二・菊池章夫・河野義章訳 同文書院 (Brown, J. (1975) *Microteaching--- A Programme of Teaching Skills --- Methuen.*)
- 8) Borg, W. R., Langer, P and Kelley, M. (1970): *The Minicourse; A Newtool for the Education of Teachers*. Education. Feb-Mar. 1-7.
- 9) 藤岡完治 (1981): 教育実習生の実地授業における意志決定過程の研究, 第19回国立大学教育工学センター協議会発表論文集, 127-128.
- 10) 小金井正己他6名 (1980): マイクロティーチングによる教育実習プログラムの開発と評価。日本教育工学雑誌。4-3。103-112。
- 11) 小金井正己 (1980): 教師教育と教育工学, その2。マイクロティーチングと教授スキル。日本教育工学雑誌 4-3。141-150。
- 12) 近藤勲 (1980): 教材開発をふくみこんだ模擬授業とその評価法。日本教育工学雑誌。4-3。85-95。
- 13) 近藤勲他3名 (1979): 教育実習経験者による教育技術の弁別能力の差異——ロールプレイングによる模擬授業の評価にもとづいて——岡山大学教育学部紀要 50-2。185-196。
- 14) 教大協教員養成制度委員会 (1980): 小学校教員養成のための教育課程の改善等について, 報告書。VIII 教育実習について 68-99。
- 15) 松下文夫他3名 (1979): 教生授業改善の試み——授業分析・評価システムの開発——香川大学教育工学センター研究報告7。13-22。
- 16) 水越敏行 (1981): 第19回国立大学教育工学センター協議会パネルディスカッション; 教科教育と教育工学「教科教育の研究と教育工学」提案資料No 3 授業成果の評価。—— (1982・2): 授業評価研究入門, 明治図書。所収予定。
- 17) 南部昌敏 (1981): 教育実習事前指導プログラムの開発と評価。第19回国立大学教育工学センター協議会発表論文集 (神戸) 125-126。
- 18) 日本教育学会教師教育に関する研究委員会 (1980): 教師教育の改善に関する実践的諸方策についての研究——第2次報告——
- 19) 新潟大学教育学部教育実践研究指導センター (1981): 教育実習に関する学生の意識。3-16。
- 20) 佐伯卓也 (1981): 言語連想テスト (I式) の処理—WAテストP-Pグラフ分析—。日本教科教育学会。6-3。21-25。
- 21) 坂元昂他3名 (1977): 簡易型マイクロティーチングにおけるフィードバックおよび評価作業の効果。日本教育工学雑誌 2-3。81-91。
- 22) 島根・香川・岡山三大学プロジェクトチーム (1981): 同前プロジェクト報告書。
- 23) Shavelson, R. J. (1973): *What is the Basic Teaching Skill? J. of Teacher Education*. 24. 141-151.
- 24) 木原清志・坂元昂 (1980): コメット法による授業設計の研究(4)——簡易法の効果測定——電子通信学会教育技術報告 ET-6。
- 25) 横浜国立大教育工学センター (1981): 教育実践研究センター年報No 2。教育実習・マイクロティーチング特集。
- 26) 土井捷三・永岡慶三・岩田敦 (1981): マイクロティーチングにおける分析・評価とその効果的利

用をめざして——コンピュータを導入して——第19
回国立大学教育工学センター協議会発表論文集。
109 - 110。

キーワード：教育実習，事前指導，授業スキル評価
システム